

平成 21 年 4 月 22 日現在

研究種目：若手研究（A）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18682004  
 研究課題名（和文）城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究  
 —デジタルコンテンツ化を通して—  
 研究課題名（英文）The study of historical geography about dynamic transformation of  
 the landscape of castle town : by digital content  
 研究代表者  
 松杉 力修（FUNASUGI RIKINOBU）  
 島根大学・法文学部・准教授  
 研究者番号：30314610

## 研究成果の概要：

本研究は、江戸期の城下町松江にかかわる絵図を用いて、デジタルコンテンツ化を通して、城下町松江の景観を復原し、絵図に記載される住人の社会的属性についての分析および、城下町松江の形成と変容に関する動態的な分析から、前近代におけるわが国の地理的特性を明らかにするものである。その結果、①表通り、裏通りには借家が多く形成され、景観の一特徴となっていたこと、松江では江戸中期の 1670 年代の絵図にはすでにみられたこと、②町絵図は原図と貼紙の 2 層にわたって形成され、原図は安永 9 年（1780）前後、貼紙は天保 12 年（1841）年代の景観であることが分かり、2 年代にわたって景観を復原することができた。その結果、ほとんどの町において、大きな居住者の変動がみられることが分かった。変動がみられなかったのは、松江藩で産物とされた生蠶やたたら製鉄にかかわる商人層のみであった。③絵図に記載される居住者の社会的属性を検討したところ、原図、貼紙とも、女性がみられることが注目される。なかには、屋敷の所有者にも女性がみられ、後家ではなく、夫婦で屋敷を所有している例もみられた。さらに娘や孫娘までが屋敷所有している事例もみられた。これは家族経営のなかで、女性が屋敷所有の権利を有していたことを指すものとみられ、江戸時代の城下町において、商家経営だけでなく、屋敷経営が重要な経営であり、その担い手に女性がみられたことは注目される。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2007 年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2008 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
年度			
年度			
総計	18,400,000	5,520,000	23,920,000

研究分野：歴史地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：城下町、景観、絵図、景観復原、社会的属性、女性、家族経営、借家

## 1. 研究開始当初の背景

城下町はわが国における都市の発展および変容を考察する上で最も重要な都市である。わが国では、最近全国各地で歴史的景観を活かした事業が推進され、その過程で、絵図や絵画資料を素材としながら、景観復原が行われている。島根県松江市では2004年歴史地理学会島根大会が開催された際に、筆者は島根県に関する絵図展を企画し、県内各地で絵図を新たに発見した。そのなかで、松江市所蔵の絵図のなかから、江戸時代後期の城下町松江のうち、町屋を詳細に描いた絵図が発見された。特に原図と貼紙の2時代にわたって景観が描かれていることが注目された。さらに町屋の土地利用や居住者まで記載された詳細な絵図であることが分かった。この絵図を分析することによって、これまであまり明らかでなかった城下町における町屋地区の景観変化について詳細に分析できるのではと考え、研究を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究では、城下町松江を事例として、城下町松江の景観の形成および変容について、歴史地理学の視点から研究を進めることを目的とする。具体的には絵図をデジタルコンテンツ化し、都市に居住する住人に着目しながら、景観の復原を行い、城下町の景観の動態的な変容を歴史地理学的に分析する。そして前近代におけるわが国の都市の地理的特性について、明らかにするものである。

## 3. 研究の方法

(1) 絵図及び関係文献の所在調査（松江市内及び全国各地の図書館など）

(2) 絵図の写真撮影（松江市所蔵の橋南地区絵図、城下町絵図など関係絵図）

(3) 撮影した写真のスキャン、統合、画像変換

(4) 絵図の製図

(5) 絵図に記載される文字の解読、記載内容の分析、データ整理

(6) 絵図に記載される聞き取り調査（得ずに記載される人物、建築などの調査）

(7) 絵図に関する古文書所在調査（屋敷売券、屋敷絵図、たたら製鉄など）

(8) (7)に関する記載内容の分析、データ整理

(9) 複数の絵図の重ね合わせ

## 4. 研究成果

(1) 2006年度

①城下町松江にかかわる絵図の所在調査を実施した。島根大学附属図書館所蔵の絵図を調査し、その結果は島根大学附属図書館編『絵図の世界―出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図―』としてまとめた。江戸初期の「松江城下町絵図（堀尾期）」は、城下町中心部ではかなり正確に描かれていることが分かり、都市計画的な絵図ではないかという指摘があった。江戸中期（元禄期）の「松江末次本町絵図」では、江戸後期の町人地区の景観が江戸中期まで遡ることが明らかとなった。

②松江市所蔵の白潟地区町絵図のうち4点の写真撮影を実施した。写真撮影に際しては、国文学研究資料館、元興寺文化財研究所の指導を受け、保存科学の観点から、絵図に全面的貼ってある貼紙の取り外し作業を、松江市、地元研究者の協力のもと実施した。年度末に画像データが完成した。

③絵図に記載される文字のうち、貼紙部分の解読を実施した。さらに記載内容の分析を実施した。その結果、蠟燭製造、醸造業など城下町松江の経済活動の一端や、裏借家の実態などが明らかとなった。成果の一部は人文地

理学会歴史地理研究部会で発表した。

④絵図に記載される住人については、まず奥出雲地方でたたら製鉄を営んでいた可部屋（桜井家）などが土地を集積しており、松江で鉄の産出にかかわっていたことが明らかになった。絵図の研究と並行して島根県雲南市吉田町のたたら製鉄経営者田部家の「鉄方御用留」の分析を進めた。

⑤城下町松江の研究を相対化するため、全国各地の城下町のうち、仙台、宮津、大和郡山、伊丹、米子、鳥取などの町絵図の研究成果を集め、松江と比較研究を実施した。

### （2）2007年度

①松江市所蔵の白潟地区町絵図のうち残りの4点の写真撮影を実施した。前年度に撮影した絵図に記載される文字のうち、原図部分の解読を開始した。さらに記載内容の分析を実施した。その結果、原図の作成年代が明らかとなった。付箋から安永9年（1780）前後の作成であることが分かった。貼紙の年代は天保12年（1841）であるので、60年の開きがあることとなる。

②原図と貼紙とを比較すると、特に寺町付近で借家が増加していることが分かった。松江の人口データを見ると、天明7年（1787）31,161人（内町方15,526人）が天保9年（1838）には36,073人（内町方20,506人）と人口が増加している。借家が人口の増加を吸収している可能性が高いことが明らかとなった。

③絵図に記載される住人についても引き続き分析を行った。魚町の犬山屋惣右衛門は、安永期には、借家を含めると13間半もの間口を有しているものの、天保期には屋敷が売却、分割されており、屋敷の間口は借家を含めてわずか3間となっていた。犬山屋は、江戸初期に、町の重立として史料に記載があ

る。江戸後期に町人の勢力交替があったことがうかがえる。

④「横浜町絵図」では、安永期には宍道湖沿いの屋敷に、厩が多数みられた。横浜町では、馬を扱う駒市が開催されていたこと、また屋敷地は宍道湖に面していることから、湖と陸とをつなぐ結節点の機能を有していたことが想定される。

⑤城下町松江の研究を相対化するため、全国各地城下町のうち、江戸、松本、金沢、名古屋、岡山、広島、佐賀、平戸などの町絵図の研究成果を集めた。

### （3）2008年度

①絵図に記載される文字のうち、貼紙の部分の文字を解読した。原図の作成年代は、安永9年（1780）前後、貼紙の年代は天保12年

（1841）前後であるので、60年の開きがあることとなるが、ほとんどの町において、居住者の変動がみられることが分かった。変動がみられなかったのは、松江大橋の近くの白潟本町の森脇甚右衛門、佐藤喜八郎など松江藩と関係をもっていた商人のみであった。彼らは松江藩で産物とされた生蠟やたたら製鉄にかかわる商人であった。居住者に大きな変動がみられるのが松江城下町の特徴であるとみることができる。

②絵図に記載される居住者の社会的属性を検討したところ、原図、貼紙とも、女性がみられることが注目される。なかには、屋敷の所有者にも女性がみられ、後家ではなく、また夫婦で屋敷を所有している例もみられた。さらには娘や孫娘までが屋敷所有している事例もみられた。これは家族経営のなかで、女性が屋敷所有の権利を有していたことを指すものとみられ、江戸時代の城下町において、商家経営だけでなく、屋敷経営が重要な経営であり、その担い手に女性がみられたことは注目される。

③また屋敷所有者だけでなく、借家居住者にも女性がみられたことが注目される。これは史料の記載から後家ではなく、女性単独の世帯であると考えられる。またこうした女性が多く住む町は寺町の借家に多くみられ、町によっても性格が異なっていたことが想定される。借家に住むこうした女性居住者がどのような生業を営み、城下町を支えていたのか、今後史料を発掘しながら検討をする必要がある。

④城下町の景観の形成過程を検討するため、延宝4年（1676）の「白潟火事図面」を全文

解読した。その結果、白潟本町の森脇甚右衛門、伊予屋庄兵衛を除けば、江戸後期にみられる商人はいなかった。江戸中期と後期の間でも城下町のなかでは、社会的変動が激しかったことがうかがえる。さらに延宝の絵図には、江戸後期の絵図と同様に、表通りにも裏通りにも借家がみられた。特に、裏通りにあたる寺町筋には裏借家が多数みられた。裏通りに借家が構成される社会的構造は、すでに17世紀中期にはみられたことが注目される。今後こうした社会的構造がいつ頃どのように形成されたのか検討をする必要があるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 船杉力修、松江城下町における景観復原の一考察—デジタル化を通して—、人文地理58-4、88-89、2006年、査読無

[学会発表] (計1件)

① 船杉力修、松江城下町における景観復原の一考察—デジタル化を通して—、人文地理学会歴史地理研究部会、2006年7月、神戸大学文学部

[図書] (計2件)

① 船杉力修、船杉力修、平成18~20年度文部科学省科学研究費若手研究(A)「城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究」報告書<地図集>、2009年、図21枚

② 船杉力修、島根大学附属図書館、オンライン、絵図の世界—出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図—、2006年、149ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

船杉 力修 (FUNASUGI RIKINOBU)  
島根大学・法文学部・准教授  
研究者番号：30314610

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

